「龍」「竜」にみる字体の併用の実態とその原因

―歴史・メディア・用法・意識・行動の各面から―

笹原宏之

【キーワード】　異体字　媒体　常用漢字表　固有名詞　なじみ　好み　頻度

0　はじめに

想像上の動物のドラゴンを意味する「リュウ」（たつ）を表す漢字には、「龍」と「竜」の 2字があることはよく知られている（注1）。しかし、「龍」と「竜」との正確な関係については、現在ほとんど知られていないようであり、また何らかの明確な意識ももたれていないのが一般的である。しかし、現実に日本ではともに多く用いられており、日本人はこれらを日常的に目にしている。後述するように、 2日に 1回程度は「龍」ないし「竜」という字を見ているようである。

本稿では、以下の各面から両字がなおも併用され、さまざまな点で住み分けを行っている実態を明らかにするとともに、それを可能としている原因を次の順に考察していく。

1　両字の関係を、歴史的な面から明らかにする。
2　現代日本の各メディアでの両字の使用実態を示す。
3　現代日本での用法ごとに分けた両字の使用実態を示す。
4　現代日本における両字に対する意識を解明する。
5　現代日本における両字に対する読字行動、接触頻度を示す。

1　中国における歴史と日本における経緯

1・1　中国での歴史

殷代の甲骨文字には、「龍」と「竜」の両者の原形と見られる字体がすでに見られる（『甲骨文編』458・『続甲骨文編』571ほか）。

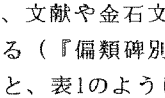
秦代の篆書の「龍」は、字全体が想像上の動物である「リュウ」の象形だとする説のほかに、いくつか字源説が見られる。

なお、「古文」と総称されるものは、その発生の時代がまちまちであり、「竜」及びその系統の字体の場合も、実はその「古」さは明確でない（『汗簡』下63ウ・『大漢和辞典』ほか）。

楷書体としては、字書、文献や金石文において、「龍」は三国時代、「竜」の原形は隋代から現れている（『偏類碑別字』・『書道大字典』ほか）。

以上の歴史をまとめると、表1のようになる。

表1



殷	甲骨文字		
秦	篆書・古文	（龍）	（竜）
六朝	楷書	龍	竜

1・2　日本での経緯

日本では、中国から漢字が伝わって以来、この両方の字体が行われてきた。そのため、戦前からの漢字施策の中でも揺れ動いていたもので、次の表2のような経緯をたどってきた。なお、戦前の「漢字整理案」（文化庁文化部国語課1996）では、「龍」の字体は実際には、右下の「一」が 1本減らされた字体とされており、また「竜」は「許容体案」と位置づけられた。また、「標準漢字表」では、「龍」を掲げつつ、「竜」も「一般ニ使用シテ差支ナイ」「簡易字体」としている。明治期以来の活字の実例を列挙した文化庁文化部国語課（1999）『明朝体活字字形一覧』365にも、戦前から「竜」の活字が見える。

表2

・戦前（実状・施策）				
活字			龍	竜
手書き			龍	竜
漢字整理案	（1919	文部省）	龍	竜
常用漢字表	（1923	臨時国語調査会）	龍	
標準漢字表	（1942	国語審議会）	龍	竜
・戦後（施策）				
人名用漢字別表	（1951	法務省）	龍	
当用漢字補正資料	（1954	文部省）		竜
JIS第1水準漢字表	（1978	通産省）	龍	竜
常用漢字表	（1981	文部省）		竜
人名用漢字許容字体表	（1981	法務省）	龍	

戦後にも、表のような変遷をたどっており、現代では、「常用漢字表」によって、「竜」が新字体、「龍」は旧字体とされている。「人名用漢字」としては、子の名付けに「龍」が戦後間もなく使えるようになり、「常用漢字表」に「竜」が採用されてからも、「龍」の字体が名付けには認められている。

2　現代日本の各メディアにおける使用実態

現代日本では、これらの 2字は混用されているが、どの程度の割合でそれぞれが使用されているのであろうか。それを明らかにするために、ここでは、主に電子化された、「常用漢字表」以降のデータを用いて、メディアごとの両字体の使用頻度と使用比率を割り出した（注2）。その結果を表3に示す。比率は繁を避け、数値の高い方だけを示したが、いずれも合計は100%となる。

この表では、下に行くほど、「常用漢字表」の字体から離れていることになる。表のうちから、摘要を注記しておく。

2・1　聖書

ここで用いた『聖書』は、この「竜」の使用から、「常用漢字表」による漢字字体の統制がとれている資料と見ることができる。

このように1つ1つの作品、文字資料ごとに見れば、どちらかの字体にすべて統

表3

	比率	用例数
	龍　竜	龍　竜
聖書（新共同訳　1987　CD）	100%	0:6
古語辞典（大日本印刷　国語課1997）	99%	2:229
国語辞典（1998岩波書店『広辞苑』第5版　CD）	98%	17:940
〃　（大日本印刷　国語課1997）	95%	8:166
国語教科書（1994～1996高校現代文・古文・漢文　FD）	93%	13:164
新聞（1999読売新聞　国語課1999）	81%	1634:6962
書籍（自然科学　大日本印刷　国語課1997）	80%	34:140
名簿（共同印刷　国語課1997）	74%	25:70
書籍（文庫本　共同印刷　国語課1997）	73%	4:11
〃　（文庫本　凸版印刷　国語課1997）	70%	268:619
雑誌（1994月刊雑誌　国語研）	53%	28:31
書籍（百科事典　凸版印刷　国語課1997）	53%	2075:2379
〃　（文学全集　凸版印刷　国語課1997）	52%	902:824
新聞（1993朝日新聞CDから　横山・笹原ほか1998）	52%	1109:1217
書籍（小説　新潮文庫の100冊　CD）	55%	585:481
インターネット（1999.11.10　Lycos Japan）	58%	107855:76518
〃　（1999.11.12　Yahoo Japan）	58%	352:491
〃　（1999.11.10　Excite）	59%	69805:47518
書籍（文学全集　共同印刷　国語課1997）	59%	53:37
名簿（凸版印刷　国語課1997）	59%	1299:898
インターネット（1999.11.10　フレッシュアイ）	61%	5219:3396
〃　（1999.11.07　goo）	62%	85387:52139
看板（1999　後掲「店名」から推定）	70%	—
テレビ（1989.01-03　国語研）	76%	22:7
雑誌（週刊誌　1996　FOCUS　CD）	79%	112:30
〃　（共同印刷　国語課1997）	85%	79:13
〃　（凸版印刷　国語課1997）	86%	619:101
書籍（文庫・単行本　大日本印刷　国語課1997）	87%	13:2
字凧（1998作成大橋栄二「日本全国伝統凧図鑑」の画像）	100%	6:0

一されているものは珍しくない。なお、百科事典（共同印刷　国語課1997）は、「龍」（100%）、「竜」（0%）だが、これは使用度数が 2：0 にすぎない。

2・2　国語辞典

『広辞苑』では、各字について全文検索をした結果、「龍」は字体に関する情報として出ているほかには、次の用例のみである。

「字凧」の項目の説明文に「龍」

「竜野」の項目の説明文に「龍野」（「行政上の市名は「龍野市」と書く。」）

「竜ケ崎」の項目の説明文に「龍ケ崎」(「行政上、市名は「龍ケ崎市」と書く。」)

「壟断・隴断・龍断」の項目

末尾の例は、唯一、見出し項目に掲げられたものである。これは、前にある「隴」の構成要素「龍」につられて「龍」としたまま、直し損ねたものであろう。

辞書類では、他の辞書についても同様の結果が出ており、見出しも本文も、「常用漢字表」に忠実に従う姿勢をとっていることが明らかである。

2・3　国語教科書

ここでは、文部省検定済みの高校の国語科の教科書のフロッピー版（A社 310ファイル）を資料に用いた。

そこでは、検定の規則に従って「常用漢字表」により、「竜」が圧倒的に多く使用されている。教科書が引用する原典が「龍」を使っていても、教科書では「竜」に置き換えているのである。ここでは「龍」の字体は、以下のようにいずれも固有名詞である人名(ペンネームを含む)と地名においてしか使われていない。

芥川龍之介

村上龍

龍田山

芥川の名は、教科書会社によっては、「竜之介」とするものもあるが、現場の教員からの意見に従って、これだけは例外的に旧字体「龍」に変えたという社もある。また、まれに普通名詞の「リュウ」「たつ」に、「龍」を用いた教科書も見られた。なお、「画竜点睛」（がりょうてんせい）では、「リョウ」が「常用漢字表」の表外音訓であるため、「がりゅうてんせい」と読ませることもある。

上の表3を見ると、一部の書籍、辞書から教科書までは、字体について、「常用漢字表」に基づいた統制が明確な形で行われているといえる（注3）。

2・4　書籍

一般の書籍は、著者やジャンル、さらに出版社、印刷所などによって、字体の使用状況がさまざまである。上の表3から、文庫本は、字体や表記の統制を受けやすいことが分かる。これは、文庫本の凡例にも明記されていることがある。

小説の資料として、「新潮文庫の100冊」という発表年代にそれぞれ開きがあるものを用いたが、それらを現代における 1つの位相として見るならば、その特徴をとらえることは可能であろう。固有名詞以外でも「龍」を使用する例がある。

2・5　雑誌

ここに挙げた月刊誌の数値は、国立国語研究所言語体系研究部第 3研究室において作成中のデータのうち、校正を完了させた確定分のデータについての数値であり、参考までに示す。そこでは、「龍」の使用が目立つが、ほとんどが固有名詞、それも人名における使用例である。

2・6　新聞

新聞社は、用字規則を作ってそれを実行しているが、両方の字体がほぼ拮抗している新聞もある。同じ新聞というメディアであっても、新聞社によって数値がかなり異なっている。これは、社によって字体、とくに人名の字体についての表記の方針が異なっていることによるものであろう。例えば、総理大臣（元）の「橋本龍太郎」であっても、社によって揺れがある（注4）。

「常用漢字表」がその前書きで対象とすると明言しているメディアであっても、同じ「常用漢字表」で対象としないと明記している個々人の表記、古典、芸術作

品、固有名詞などを掲載していることもあり、そこには葛藤が起こるのである。表3の『朝日新聞』から書籍（小説）のあたりで、表外字体の方が逆転して多用されるようになる。

2・7　インターネットのホームページ

インターネットのホームページは、いずれの検索エンジンを用いた 1字検索によっても、ほぼ60％：40％という比率を示し、数値が安定している。インターネット上の文章を総合すると、そのような比率で使われていることを示すものであろう（注5）。固有名詞だけでなく、普通名詞に「龍」を用いる例も少なくない。

インターネットのホームページは、一般の人が個人で文章を作製したり転記しているケースが多いため、使用している入力ソフトの影響が現れる可能性が大きい。たとえば、「ＡＴＯＫ８」では「リュウ」だと「竜」も「龍」も変換できるが、「キョウリュウ」「タツマキ」という熟語では「常用漢字表」の「恐竜」「竜巻」しか変換できない。後者には、「タツマキ」の形状と「竜」の字体の類似性や、現代人の感覚では「タツマキ」に「リュウ」らしさの乏しい点のほか、2 字の下部の形状を無意識に揃えようとする同化現象も影響している可能性がある（注6）。

2・8　テレビ

これは、国立国語研究所言語体系研究部第 2研究室の調査資料に基づき、同第3研究室により文字調査が行われているデータである。今後調査が進む中で、数値に変動が生じる可能性があるが、参考までに示した。固有名詞がほとんどである。

2・9　名簿

同じ名簿という資料であっても、2社で数値に差を示している。ともに姓名・地名が主であるようだが、原因としては、編集方針すなわち用字、字体の統一の有無ないし強弱や、掲載者の世代、地域などの違いが考えられる。

2・10　看板

表3で、看板とテレビ辺りから下に示したメディアは、一層「常用漢字表」を超えた世界となっていく。

看板は、1字からなる店名についてのデータ（後述）を基に推測したものである。しかし、2字以上の店名では、「龍」の比率が高まるなどの可能性がある。

2・11　字凧

字凧そのものは、情報を伝達するためのメディアとはいえないが、文字の記されることのある媒体としてここに参考までに挙げた。

1999年11月11日現在、ＷＥＢ上に存する大橋氏のホームページに示された写真画像をすべて調べると、「龍」だけで「竜」はない。活字風のものはなく、いずれも筆字風のものばかりである。なお、凧に書かれた字に「龍」が多いことは、出久根達郎に「龍の字凧」という文章があることにも現れている（『ＢＡＳＨＯ』2000年 1月号 9ページ）（注7）。固有名詞でないが、旧字体が行われる例である。

3　現代日本での用法（固有名詞の各位相）ごとの使用実態

先に見たように、媒体によっては「龍」を用いた固有名詞であっても、新字体に統一するというものがある。教科書はその代表的なものであり、新聞にもそのような方針をとっているものがあった。

そのような媒体のもつバイアスがかかる前の、固有名詞自体に使われている本来の字体を考えるために、各種の固有名詞のデータを用いて集計し、表4に示す。

表4

	比率	用例数
	龍　竜	龍　竜
駅名（1995石野哲『日本の鉄道全駅駅名漢字事典』）	90%	2:19
地名（1997国土地理院「自然地名集」　FD）	76%	33:102
〃　（1999.06日本加除出版「日本行政区画便覧」　CD）	60%	603:897
〃　（1997郵政省「ぽすたるガイド」　FD）	53%	319:354
姓名（1996ＮＴＴ「ハローページ」　JCS委員会資料）	55%	38126:46979
店名（1999.11.08ＮＴＴ東日本「インターネット　タウンページ」）	70%	70:30

上記の結果について、以下に摘要を記す。

3・1　駅名

駅名は、固有名詞の中でも人為による加工がとくに行われやすい人工的なものといえ、用字だけでなく字体にも統制が効いていることが分かる。特殊なケースを除くと、複雑な文字よりは、利用者にとってできる限り簡単な方が便利でいいという公共施設の性質も原因となっているのであろう。旧字体使用は、以下の 2 箇所のみである。

龍岡城（たつおかじょう）

龍王峡（りゅうおうきょう）

3・2　地名

まず行政地名としては、旧字体を用いたものに、

龍野市

龍ヶ崎市

のように、面積、人口などが大きい地名があるので、それらが地名に「龍」が使われているという印象を残しやすいようである。しかし、字（あざ）、通称の類の小地名まで含めた「日本行政区画便覧」によると、全体としては、新字体の方が優勢であることがうかがえる。なお、これも延べではなく、異なりの地点数に限定して数えると、246：208 となり、比率が逆転して旧字体の方が多くなる（数値はエリク=ロング氏（国立国語研究所非常勤研究員）の集計による）。

3・3　人名

ＮＴＴ各社の電話帳に収録されている姓名には、「竜」の方がじゃっかん多いが、そこに著名人が掲載されることは少ない。有名人の姓名には、「坂本龍馬」「坂本竜馬」のように揺れているものもあるが、作家のペンネーム、プロレスラ

一のリングネームの類を含めて、旧字体「龍」の使用が目立つようである。

芥川龍之介

坂本龍一

芥川自身は、手書きで「龍之介」（例：『現代日本文学全集』口絵写真）のように書いており、それに基づく戦前からの活字印刷によって、その編者や読者は、この字体を用いた人名表記に対するなじみや規範意識が発生している。そのために、やはり旧字体を用いた「龍之介」という表記を好む傾向がある。

「龍」を名に用いた著名人が複数いるために、人名では「龍」というイメージがもたれやすいようだが、このように日本中の姓名を合計すると「竜」の方がやや多くなっているようである。現代でも、「龍」「竜」はともに名付けに用いることが可能であり、字体のもつイメージによって選択されることや、単に姓名判断で画数によって決めるケースもあると思われる。

3・4　店名

これは、ＮＴＴのホームページで、全国の「龍」ないし「竜」という 1字の店名・社名の類について検索したものである。そこでは、両字体は同一視されており、全部で193件ヒットした中で、100件のみが表示された。各ページの「竜」の内訳は、5・7・8・4・6件となっており、その配列もランダムのようである。

このほか、いわゆる暴走族の名前には「龍」を用いた「龍神會」があった（1999.11）。これは、板橋区の道路脇の壁にペンキで書かれているものであり、画数の多い字体を好むという位相性の現れ（笹原1993）と、「リュウ」らしい重厚な形状を好んだためと考えられる。

4　現代日本における両字に対する意識

次に、漢字の字体に関する意識の面から検討を加える。次の表5の数値は、いずれも日本人大学生に対して行った結果を集計したものである。なお、なじみと好みの調査についての詳細は、笹原・横山（1998）を参照されたい。どちらを多く見ると思うかという印象つまり主観頻度の数値には、男性の回答が含まれている。

表5

	比率		用例数	
	龍	竜	龍 竜	
主観頻度（1999.11.04　Ａ大学）	95%	5%	37: 2	人
なじみ度（1997　女子大学３校）	30%	70%	31:74	人
好 み 度（1997　女子大学３校）	52%	48%	49:45	人

人の意識、言い換えると心的辞書における「龍」「竜」の頻度は、複雑な結果を呈した。なじみというものは、旧「当用漢字表」やそれに代わった「常用漢字表」にある字の場合、低年齢のうちから教材として使ってきた学校教科書の類に用いられていることよって形成されてきたところが大きいと考えられる。「竜」

になじみが傾いていることはそれに沿ったものといえる。

しかし、そのように教科書で教えられてきた字であるにもかかわらず、好み度の数値は、表外字体「龍」の方が「竜」よりもじゃっかん高い。つまり、なじみは「竜」にあっても、好きな字体は「龍」という傾向があることになる。これは、「広：廣」、「国：國」などの結果と同様であり、目にする固有名詞には「龍」が多く使われていることがその要因となっていると思われる。

次に、なじみと主観頻度との関係についてみてみる。両者は、多くの場合同じ傾向を示すものであるが、この「龍」「竜」では全く一致していない。この不一致の原因として、次の諸点が複合していることが考えられる。

1　この字特有の上記の複雑な経緯

2　旧字体の印象の深さ、字体の象形性の高さ（「リュウ」のイメージにより近い）

3　調査した季節の違い（女子大学調査と異なり、A大学調査は年末（来年の干支は辰）近くである）

4　大学ごとの学生の文字生活、接触媒体の差

5　現代日本の文字生活における読字行動、接触頻度

人間の文字生活における接触頻度の意義については、笹原（1999）に述べたので、参照されたい。今回は、「龍」「竜」についてA大学において調査を行った。

表6

調査対象期間	提出日	
1999.11.04～11	11.11	（ほとんどがこの日に提出された）
11.04～18	11.18	（1人いたが「龍」「竜」の報告は0件）
11.11～18	11.18	
11.19～25	12.02	

1人につき対象を 1週間として調査期間を短くしたが、これでも一定の傾向は出ると考えられる。報告者は、計35人（報告接触数が 0回の 1人を含む。ほかには、未報告者の中に、0回はいないようであった）、その報告数は、計延べ149回にのぼった（注8）。これは、平均すると、 1人が 2日でどちらかの字体を 1回以上目にしていることになる。接触頻度は次の表7のようになった。

表7

比率		用例数
龍	竜	
62%	38%	92:57　件

個人別では、最も多い者で16件、少ない者で前述のように0件であった。報告者の中には、「竜」のみ、あるいは「龍」のみにしか接触しなかったという者もいた。これは、調査期間が短かったことによるものであろう。

ここで得られた留意点として、次の 2点が挙げられる。

1　個人の中での 6：4 程度の接触頻度や主観頻度は、○×式の選択による回答では 1：0 となってしまい、その集計では分布が極端化すること

2　主に接触頻度によって形成された主観頻度は、6：4 程度であっても、次第に意識の中で、例えば 8：2 へと変わってしまうように、極端化すること

5・1　媒体別接触頻度

接触した媒体（メディア）ごとに、接触数を足し合わせて、新字体の比率が高い順に並べると、表8のようになる。ほかに、その他（59%：41%　19：13）、不明（100%：0%　2：0）がある。

表8

	比率		用例数	文字列例（数値は頻度）
	龍	竜	龍 竜	
画面	50%	50%	8: 8	坂本龍一 2
新聞	52%		11:10	坂本龍一 3　芥川竜之介 2
テレビ	54%		14:12	（上島）竜平 3　龍 3
雑誌	63%		10: 6	芥川竜之介 3　坂本龍一 2
書籍	67%		14: 7	龍 2
看板	93%		14: 1	龍泉院 2　青龍門 2

ここでいう画面とは、テレビを除く、パソコン（インターネット・ワープロ）画面の類を指している。これでは、両字体が拮抗している。

テレビでもほぼ拮抗しており、先に示したテレビでの使用頻度とは、数値に差が出ている。これは、10年の間のテレビ放送というもの自体の時代的な変化のほか、視聴者層や視聴率が関係しているものであろう。テレビは、新聞などとともに、「常用漢字表」の対象とされている媒体であるが、ここでもほぼ拮抗している。一般書籍や雑誌も同様にその対象となっているものであるが、それらではむしろ旧字体の方が多くなっている。

なお、今回の報告者は年齢に広がりがあるものの全員が大学生であるため、通う大学の近隣の施設名の報告が複数あった。一方、家庭教師や教育実習などによって中学校・高等学校の文部省検定済み教科書での接触がありうるが、今回は、たまたまそれらの時期でもなかったようであり、接触頻度は 0であった。学校教科書での字の接触は、原則として高校生までの低年齢期に限られたものと位置づけることが可能である。学校で習った字は「竜」ではなく「龍」だったと思っている人もいたが、それでも「竜」に潜在的になじみを生んでいたと考えられる。

表記や字体への信頼度が教科書と並んで高い国語辞書や漢和辞書の場合も、今回の調査で接触頻度は 0であった。それらを調べごとなどに用いることは、日常においてそれほど多くはないことを意味している。大学生になってからは、それらの媒体における「竜」への接触頻度がきわめて少なくなっており、それらの使用頻度とは切り離して考える必要があるものといえる。

5・2　位相（品詞）別接触頻度

次に、接触頻度の調査結果を、位相あるいは品詞別に分類し直して、見ていく。

表9

	比率 龍　竜	用例数 龍　竜	文字列例（数値は頻度）
普通名詞	63%	17:10	龍10　龍年 2
固有名詞			
商品名	67	3: 6	竜田 5　烏龍茶 1　龍王伝説(パチンコ台)ほか 1
地名	67	2: 4	竜頭の滝 3（ほか龍も 1）
人名	61	47:30	坂本龍一 11　芥川龍之介 6（ほか竜も 2） 上島竜平ほか 3
店名	85	11: 2	青龍門 3
寺名	100	5: 0	龍泉院 2

上表に示したほかに、その他・不明（58%：42%　7：5）があった。

普通名詞の表記・字体については、「常用漢字表」の対象であるが、接触の実態では、普通名詞においても「龍」の方が多く、逆転している実態が明らかとなった。

新字体の方が多かったのは、商品名と地名だけである。その中でも、固有名詞の多かった食品名の「竜田」（～揚げ・～あげサンド・海老～。ほかに普通名詞も 1）に「龍田」が見られなかったことから考えると、その要因は、それらに想像上の動物である「リュウ」らしい猛々しいイメージや字画からくる重厚な感覚が不要であることにあろう。

店名で、「龍」が圧倒的に多いのは、中華料理店での接触がそのほとんどを占めていることと関連があろう。これは、現在、中国大陸や台湾では「竜」を使うことはほとんどなく、「龍」か「龙（龍の簡体字）」しか使わないことも影響しているのであろう（注9）。一方、寺の名は、戦前からの名の字体を引き継いでいるために、「龍」が多くなっているとみられる。

接触頻度の集計によると、報告者は「龍」ないし「竜」の字の半数以上を、人名の中で目にしていることが判明した。先に示した人名の使用頻度のデータでは、「竜」の方がじゃっかん多かったが、有名人に限ると逆となっているようである。こうした接触行動が、字体に対する好みの数値につながっていると考えられる。前述のように、固有名詞に頻出する「廣」「國」などの旧字体も、なじみよりも好みの方が高い数値を示している。

接触頻度というものを調べることの意義は、それによって社会的な使用頻度のそれぞれの位置付けと、人間の様々な意識の位置付けとが可能となり、さらにそれらを有機的に結びつけることができることにある。また、同じ人名という枠に入るものであっても、そのジャンル分け、露出による分類などが必要であり、それぞれが人間に与えるインパクトの違い、すなわち質的な差異も考えなければならない。

6 おわりに

以上に示したように、「常用漢字表」で採用された「竜」が広まっている一方で、旧字体と位置付けられた「龍」も、一部で根強く使われている。

この「龍」を用いる要因としては、これまでに間接的に触れてきた人間による字の使用行動という面から見ると、以下の点が考えられる。

1 文献（古代～現代）の忠実な引用・転載。
2 固有名詞の忠実な表記。
姓名も地名も異なりではほぼ拮抗しているが、若い人などに人気のある特定の人の名や店名などで「龍」の方が多いため、「龍」の方がメディアに多く登場している。
3 普通名詞の、好みやなじみなどに基づく習慣的、懐古的、趣味的な表記。

また、その理由については、人間の意識の面から次のことが考えられる。

1 「龍」「竜」の一方が「常用漢字表」における旧字体、他方が新字体だという新旧の関係、つまり同じ字という関係にあるとは意識せずに、別々の字だと意識する者がいること。
2 文部省が「常用漢字表」で「龍」ではなく「竜」に決めているという事実の認識とそれに伴う規範意識が一般に薄く、かつ「なじみ」や「好み」があること。
3 「龍」が以前からの経緯で、各種のメディアにおいて有名人の固有名詞などで残存しているという習慣が接触頻度につながり、ある程度のなじみと強い好みを生んでいる。これが義務教育で習った「竜」へのなじみをも、次第に覆いかぶしていくと考えられる。
4 画数が多いために、「リュウ」のイメージにあった形、勇ましい形、昔風の形、伝統的な形、重厚な形は「龍」だという意識から、義務教育で習った「竜」よりも強い好みを生んでいる。実際に、「リュウ」ではなく「恐リュウ」や「タツノオトシゴ」の場合は「龍」ではなく「竜」だという者もいる。

これらが原因となって、「龍」の使用が発生しており、メディアや固有名詞などの位相、品詞性の違いによって、その使用比率の傾向を異にしている。その結果、人はさまざまな場面によって、それぞれの字体を目にしているのである。

これと同様の現象は、「当用漢字表」の時代の表外字「螢」と、「常用漢字表」に採用された「蛍」にも見られる。また、「当用漢字表」時代の「燈」と、「常用漢字表」で正式にそれに代わった「灯」も、「行燈」と「電灯」などで分布を見せることがある。一般の漢字使用の目安として「常用漢字表」が定められている現代においても、異体字は各種の位相で、さまざまな意識に支えられながら使われ続けているといえる。

文献

笹原宏之（1993）「位相文字の性格と実態」早稲田大学国語学会『早稲田日本語研究』1
笹原宏之（1999）「漢字字体に対する大学生の接触頻度」『計量国語学』22巻2号
笹原宏之・横山詔一（1998）「異体字選択に影響する要因」『計量国語学』21巻7号
笹原宏之・横山詔一・エリク＝ロング（2000）「朝日新聞漢字字体頻度表（仮題）」
文化庁文化部国語課（1996）『漢字字体資料集　諸案集成Ⅰ』
文化庁文化部国語課（1997）『漢字出現頻度数調査』
文化庁文化部国語課・読売新聞編集局（1999）「漢字出現頻度数調査」（内部資料）
横山詔一・笹原宏之・野崎浩成・エリク=ロング(1998)『新聞電子メディアの漢字　朝日新聞CD-ROMによる漢字頻度表』(国立国語研究所プロジェクト選書1　三省堂)

注

(1) なお、干支の場合には「たつ」に「辰」を当てることもあるが、これは「シン」という音を有する別字であり、ここでは触れない。

(2) 「龍」「竜」はＪＩＳ漢字でコード入れ替えがなされていないので、電子化データと紙面との関係はかなり安定的である。

(3) 「中学校・高校教科書の語彙調査　フロッピー版」（国立国語研究所1994）においては、「竜」と「龍」が区別されているようであるが、「当用漢字表」当時の教科書を調べたものであるため、今回は用いない。

(4) 新聞によっては、「橋本竜太郎」（『読売新聞』『日本経済新聞』など）とするように、強い統制を効かせたものがある。

(5) インターネットのＷＥＢを検索エンジンで 1字検索すると、単なるＪＩＳ漢字の表の中の例や、文字化けしたデータまでひっかかる。それはほぼ半々の割合で検索されていると推測される。

infoseekは、「龍」「竜」の 2字を同一視しており、ともに40001件（1999年11月8日現在）ヒットする。なお、このようなデータは珍しくない。例えば、ある百科事典のＣＤ―ＲＯＭも両字体を同一視しているようであり、「地図で見る『日本地名索引』」（ＣＤ―ＲＯＭ）も、入力データ自体が「竜」が1372件、「龍」は 0件と、「竜」に統一されている。検索ソフトを使ってみても、同様である。

より個人性の高いメディアについても、調査を行う必要があろう。筆者は、携帯電話のメールや、個人の日記のデータについても、複数の筆者（本人）から情報の提供を受けて調査に着手している。

(6) 「タツノオトシゴ」にも、その形状の「竜」との類似性、「リュウ」らしさの欠如があることが指摘できる。

(7) 字凧に「竜」と書いた例を凧の写真で見たことがあるが、やはり用例は少ない。概して、1例のみを示した資料は、代表的・典型的な例を挙げることが多く、少ないながら複数の例を示す資料は、各種のものを挙げようとして、かなり珍しいものまで含むことが多い。

(8) 集計方針は、さまざまな内容を有する報告物について、条件の均一化を図るために、以下のようにした。1～ 3に該当する報告者は、数名にすぎない。

1　同じ字体を、同じもので複数回見た。　：接触頻度 1と数えた。
2　違う日付の同じ新聞で、同じ文字列を複数見た。：　〃
3　何かで調べてしまった。　：それぞれ集計方針 1に従い、見た字体ごとに接触頻度 1とした。

なお、「龍」「竜」を構成要素に含むものも記録するように指示を出したが、報告が全員に徹底してはいないようであるため、ここでは集計しなかった。

(9) ただし、Ａ大学の安田文香氏の報告では、都内のある『ハローページ』では、「中華料理店」の名前には、「中国料理店」と異なり「竜」の方が「龍」より倍以上多いという。それらの中には、チェーン店もあったが、そこでも字体が不統一とみられるものがあったという。

謝辞

データの作製、使用に当たっては、横山詔一氏（国立国語研究所）、エリク=ロング氏（同非常勤研究員）、大塚みさ氏（実践女子短期大学）、飯間浩明氏（早稲田大学）ほかの協力を得た部分がある。記して、御礼申し上げる。